尾原ダム周辺の新たな中核施設

「島根県さくらおろち湖ボート競技施設」が竣工

尾原ダム周辺地域活性化のひとつとして島根県で整備が進められていたボート競技施設が完成し、竣工式が十月十六日、同施設艇庫で行われました。

この競技施設は、延長一千メートル、幅十二・五メートル、六レーンのコースと、配艇場と駐車場を併設した艇庫（約九十艇収容可能）からなり、約十一億一千万円の事業費をかけ整備されました。

またコースは、全日本選手権や国民体育大会のボート競技を開催することができる、県内唯一の日本ボート協会公認常設B級コースです。

式には、主催者の溝口善兵衛島根県知事や、細田博之衆議院議員、竹下亘衆議院議員、青木一彦参議院議員をはじめ、多くの来賓、関係者など約百五十人が出席しました。

▲完成を祝いテープカット

式のはじめに、日本ボート協会の山崎佐知夫会長代理から溝口知事に公認B級コースの認定証が授与され、溝口知事からは「豊かな自然に囲まれ見晴らしの良い当施設が、多くの方々に利用されるよう努力したい。そして、自転車競技施設や周辺の観光施設と連携し、地域活性化を図りたい」とあいさつがありました。

また、井上町長は「開かれたダムとしてその機能を発揮できるよう、近隣市町と連携を密にして地域を元気にしていきたい」と周辺地域活性化への決意を述べました。

競技コースをバックにした関係者によるテープカットの後には、島根大学や松江北高校などの選手による、シングルスカル、ダブルスカル、ナックルフォアの三種目のボートレースが行われたほか、雲南市温泉小学校児童などによりヘラブナ一千匹がダム湖に放流され、施設の完成に花を添えました。

同コースでは、来年度に全国高校選抜大会の中国予選など七大会が開催される予定で、周辺の施設と連携した地域活性化が一層期待されます。

▲レースを見守る来場者

湖面を臨み　さくらおろち湖祭り　賑わう

ボート競技施設が竣工した十月十六日、同施設隣地で「さくらおろち湖祭り２０１１」が開催されました。

このイベントは、ダム湖に湛水されたことで「尾原ダム湖祭り」から改称し、新たなスタートを切りました。

オープニングでは、亀山幹生実行委員長が「さくらおろち湖という素晴らしい資源のもと、地域活性化に取り組んでいきたい」とあいさつ。ステージでは、警察音楽隊による演奏やよさこい踊りなど多彩なイベントが繰り広げられました。

また会場には、地元特産品などを販売するテントが軒を連ね、多くの来場者で賑わいました。

▲賑わう会場

「金」・「銀」を支えた「鉄」の技術

公開講座で「たたら」の価値を再認識

「金・銀を支えた鉄の技術」をテーマに、技術伝播や変遷の検証から「たたら」の価値を再認識しようと、鉄の道文化圏推進協議会（奥出雲町、安来市、雲南市で構成）が主催した「たたら公開講座」が十一月五日、県立古代出雲歴史博物館（出雲市）で開催され、約百三十人が参加しました。

開講にあたり、同協議会会長の井上町長から「協議会では、たたらを後世に伝えていこうと学習を重ねている。今回も皆さんと一緒に勉強していきたい」とあいさつがありました。

講座では、基調講演のほか、たたらシンポジウムで講演などを行った、国立科学博物館理工学研究部の鈴木一義グループ長をコーディネーターに、パネルディスカッションが行われました。

石見銀山、佐渡金銀山からみる「たたら」

～講演から見えてきた関連性～

基調講演では、石見銀山資料館の仲野義文館長が「石見銀山の開発とたたら製鉄」、新潟県佐渡市世界遺産推進課の若林篤男氏は「佐渡西三川砂金山の採掘技法」と題し、それぞれ講演を行いました。

▲パネルディスカッションの様子

両氏は、金・銀の採掘方法とたたらの砂鉄採取法との相違点を話しながらも、過去の文献や互いの共通点から、相互依存あるいは技術の原点はたたらにあると指摘。技術者の交流などによる相互の密接な関連性についてそれぞれ言及しました。

「たたら」の価値を再考する新たな視点

～パネルディスカッション～

パネルディスカッションでは、パネリストとして基調講演を行った仲野館長と若林氏に、新潟県教育庁世界遺産登録推進室の小田由美子副参事を加え、たたらについて意見を交わしました。

議論は、基調講演でも触れた相互の関連性を中心に展開。その中で、仲野館長は「たたらだけを考えると本来の価値が見えない。他との関わりを見ることが重要」とし、若林氏と小田副参事は「採掘技法や測量技術から技術伝播や交流があったといえる」と相互の関連性を改めて主張しました。

鈴木グループ長は「たたらは『ものづくりの原点』として世界遺産登録への提案もあるが、自信を持ってその価値を主張するためにも、鉄だけでなく金・銀を含めた調査研究が必要になってくる」と議論をまとめました。

参加者は、新たな視点からの議論を熱心に聴き、たたらについて認識を深めていました。

たたらの世界観に観衆魅了

語る・奏でる・舞う「たたらの炎」

～亀高・總光寺で舞台～

全国的に「たたら」への注目が高まる中、朗読や日本舞踊などで、その世界観を伝える催しが十月二十三日、亀嵩の總光寺で行われました。

この催しは、古典などを題材に様々な企画を行っている「古典を『語る・奏でる・舞う』実行委員会」（櫻井誠己会長）が主催したもので、会場には町内外から約二百五十人が訪れました。

▲たたら吹き番子唄

櫻井会長は「世界で唯一たたらを操業している奥出雲町で開催できてうれしい。この会が、たたらを縁に地域活動の広がりにつながってほしい」とあいさつ。さらに井上町長からは「この会により、たたら文化が一層広く浸透してほしい」と期待を寄せました。

▲日本舞踊「出雲阿国」

本堂に設けられた舞台では、仁多乃炎太鼓による太鼓演奏、金屋子神話の朗読、日刀保たたらの木原明村下による講話のほか、様々な古典芸能活動を行う美月波社中（松江）による仕事唄「たたら吹き番子唄」と日本舞踊・長唄「出雲阿国」などが披露されました。

寺院の本堂という厳粛な雰囲気の中で繰り広げられる「たたら」に関わる講話や踊りは、光と影と静寂が作り出す非日常的な空間と調和して、観客を魅了していました。